富士山登山口の宿坊集落における町並及び屋敷の変容に関する研究
―甲斐国都留郡上吉田宿の御師町を中心事例として―

建設工学専攻（修士課程）503130 岡崎正人
建築史研究室　指導教員；伊藤洋子教授

序 - 研究目的

山梨県富士吉田市の上吉田地区は、室町時代後期から江戸時代にかけて、富士山を信仰する登山者の宿場として栄え、それに伴った町並が形成されていた。しかし、信仰の衰退や交通網の発達により麓の町は廃れてしまった。

先行研究では、地割の変遷や屋敷の特徴が明らかになっている。本研究では、富士山登山口全体の隆盛と衰退において、「7つの登山口のうち、なぜ吉田口が最も栄え、そして今も唯一面影を残しているのか」を、社会的背景と建築的変容との関連性や地理的要素などから解明する。また、行政や住民の声を頂戴し、富士山登山口の今後についても検討する。

Ⅰ - 信仰と登山

<富士講と御師>

古代の人々にとって、富士山は見て崇める対象であったが、仏教が渡来すると密教修練の霊場として富士山に登るようになった。その登頂を目的とした大組織が「富士講」であり、江戸時代に最も隆盛した。富士登山という実践に基礎をおいた、神道とも仏教とも儒教ともつかぬ新興宗教である。

夏の開山期になると、富士講信徒は富士山登頂のために各登山口へやって来る。この時に彼らの世話や案内をする人々が「御師」である。御師は宿泊業を営む傍ら、神官という立場でもあるため、各御師坊には御神殿が設けられている。また、閉山期には檀家周りや配礼活動を行い、檀家を増やしていた。夏の宿泊業より精を出していたとのことである。

<登山道と浅間神社>

どの登山口にも浅間神社が鎮座しており、宿坊集落・浅間神社・登山道で1つの構成になっている。しかし、登山口によりその形態が異なる。

右図は、神社を正面に考えた登山口の簡略図である。須山と御殿場の宿坊集落は、他と違い街道沿いではない。また、川口（河口）以外は神社の境内裏から登山道が伸びており、川口においては参拝後に再び御師町に戻り町を通過して登山道に至る。

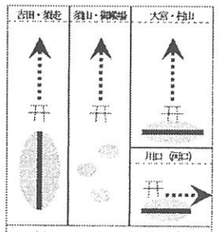

図1　集落―神社―登山道

Ⅱ - 上吉田宿の成立と変容

<集落の移転>

元亀3年（1572）、「雪代」という災害を受けたため、集落全体を移転した。その際、計画的に地割を行ない、町が誕生した。また、この整備は、御師との間に師檀関係が結ばれていた領主武田氏の助成によるものとされている。

<地割の分筆>

明治初年の『地券一筆限帳』には、101軒の御師名が記載されているが、ほぼ同時期の地籍図には77軒しか確認できない。その他、資料により数字はまちまちだが、ここでは明治初期の地籍図と2004年の住宅地図を用いて視覚的に比較する。

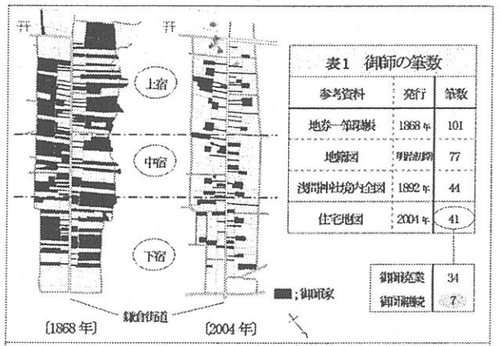

表1　御師の筆数

参考資料	発行	筆数
地券一筆限帳	1868年	101
地籍図	明治初期	77
浅間神社坊舎全図	1892年	44
住宅地図	2004年	41
御師旅業		34
御師兼旅業		7

図2　上吉田宿の骨格と地割変遷

上図の通り、道路が多少敷設された以外、町の骨格はほぼ無変化と言える。しかし分筆はなおも進み、さらに筆数の変化の通りこの地を去る家も少なく無い。まして、御師業を継続されている家は7軒のみというのが現状である。

Ⅲ - 御師坊

<町並構成>

御師坊は主に奥の敷地に構え、短冊状の土地に対応すべく竪家が多くを占めるが、街道沿いの敷地には一般の宿場町と同様に横家が多く建つ。

表2　奥/前，竪/横（1868）

	東町		西町	
	奥/前	竪/横	奥/前	竪/横
上宿	6/1	5/2	8/1	8/1
中宿	5/5	6/4	2/2	2/2
下宿	7/1	3/5	4/2	2/4

奥屋敷と前屋敷、竪家と横家が並存しているのは、格式高い御師坊と接客業に徹する旅館とが混在しているという、吉田口の大きな特徴と言える。例えば川口では奥に、その他の地域では街道沿いに、それぞれ屋敷を構える傾向が強い。

<屋敷構成>

計画された地割は、主軸道路に対して垂直方向に細長い短冊状をなしている。通りから大まかに「前屋敷30間＋奥屋敷30間＋裏地20間」に分けられる。奥屋敷へは、前屋敷にある細長いタツミチを通り、水路を渡って至る。

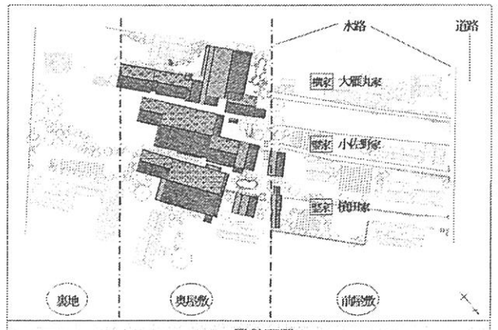

図3　屋敷配置

<平面構成>

文久1年（1861）建設の御師坊「小佐野家」と、明和5年（1768）建設で明治初期に増築した同「外川家」と、明治初期建設の民宿「刑部旅館」を例に、平面構成の変遷を追う。

①式台玄関・中の口・勝手口と、入口が複数設けてある。
②上手（南側）に来訪者の空間、下手（北側）に家人の空間と、2列に並列する構成をとっている。
③式台玄関の直線状最奥に、御神殿が設けてある。
④座敷が鍵型に配置されている。奥の座敷は上段の間。

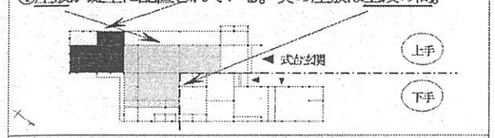

図4　御師坊の典型例（「小佐野家」－1861年）

家々によって若干の差異は当然見られるが、この様な御師坊の構成は、他の坊にも見られる典型である。

ところで、明治期になると御師は一般化され農民も旅館業を始めた。また、一般登山者の急増により需要は御師坊から民宿や旅館に移行し、平面構成も当然変化した。

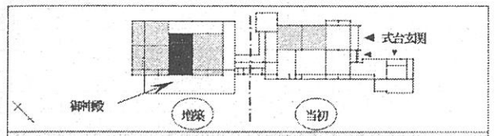

図5　「外川家」－1768年／明治初期

御師坊「外川家」は、富士講が盛んだった江戸中期に建設され、当初部は小佐野家の様に2列に並列する構成をとっているが、比較的自由に設計されていることがわかる。

明治初期、登山者の増加に伴い座敷を増築し、御神殿もその際に移設したと考えられる。また、最奥にあるべきはずの御神殿より奥に座敷（上段の間）が設けてあることから、この頃には宗教色が徐々に薄れていたことが窺える。

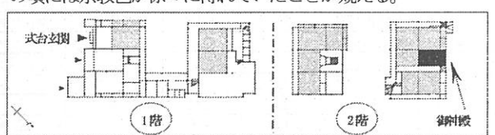

図6　「刑部旅館」－明治初期

民宿「刑部旅館」も複数の入口や御神殿が設けられているなど、御師坊との類似性を見ることができる。しかし建築に反映される宗教色は薄まり、かつ観光登山に対処すべく本格的に宿を経営することを目的としているのは明確だ。

Ⅳ - 富士登山の主な歴史

<江戸期>

富士講の開祖である長谷川角行の6世食行身禄が、享保18年（1733）に富士山中で即身成仏した。これを契機に身禄の信徒は江戸にて急増した。そして身禄が吉田口から登山したため、多くの信徒に利用された吉田口は隆盛した。

<明治期>

明治16年（1883）、交通の便が良い御殿場口が開削され、他の登山口は登山者を取られ衰退していった。しかし吉田口は富士講信徒による利用が続き、繁栄を維持できた。

<大正期>

富士講の勢力が衰えたことにより富士登山に対する宗教色は薄れ、さらに交通網がより発達したことで、信仰に無関係な一般登山者が増え続けた。

<昭和期>

昭和39年（1964）、富士スバルラインの開通により、5合目まで車で行けるようになった。また、都心からバスツアーなどで容易に登山が可能となり、信仰登山は本格的に観光登山へと変わった。これにより麓の御師町は利用されなくなり、衰退の道を辿らざるを得なくなった。

図7　登山道

Ⅴ - 富士山登山口の現状

<行政の動き>

現在、富士吉田市・富士河口湖町・富士宮市・御殿場市・小山町の三市二町にて、登山の宣伝や富士山の美化を目的に観光地としての振興発展に寄与すべく「富士山五口協議会」を設けている。しかし、現状は観光促進しか行われておらず、例えば登山道におけるトイレの整備などは、各市町で個別に行われている。行政同士の協力はこれからといったところだ。

表3　各登山口及び行政の現状

	吉田	川口	大宮	村山	須山	須走	御殿場
町並の面影	○	△	×	×	×	×	×
家屋の残存	○	△	×	×	△	×	×
行政の動き	△	×	○	×	△	×	×

吉田口登山道は、1996年「歴史の道整備活用推進事業」の対象に選出され、発掘調査や整備が進められている。しかし、この登山道は県道のため、登山道全体の整備は山梨県が、各拠点の石造の調査や修景などの整備は富士吉田市が、それぞれ役割を分担して行っている。

須山口では登山道保存会が設立されており、整備が徐々に進められているが行政は関与していない。また、大宮口の富士宮市では、2006年の浅間大社鎮座1200周年に向け大社付近の公園整備や鳥居の再建など、動きが大きい。

<住民の想い>

図2に示した41軒のお宅にアンケートを依頼したところ、12軒の返信を頂いた。そのうち、9軒の方が上吉田宿の復原を望んでおり、この地の文化や自然に愛着を抱いている。しかし、市の政策の方向性は未だ明確ではない。

終 - 総論

吉田口は多数の富士講信徒の往来や江戸からの交通網が確保されていたことにより、全登山口の中で最も隆盛し、衰退の時期も他より遅らせることができた。しかし、昭和になると上吉田より裾に宿が次々に建設され、さらに車社会の発達により町は通過されることとなった。

しかし現在、吉田口は貴重にも町並の面影を残している。その要因として、町が衰退も発展してないことが考えられる。したがって、行政がさほど関与していないが故、家々の事情で御師坊が消失してしまう危険性は十分に予想される。

そもそも特有の文化を伴って発展した町であるため、建築的復原の前に歴史や文化を重んじるべきだろう。何より住民自身がそれを継承していこうとしている想いは貴重だ。

《参考文献》

・伊藤裕久『近世都市の原型』中央公論美術出版／2003
・三浦俊吉『関東農村の御師集落』甲文堂出版部／1973
・岩科小一郎『富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰』名著出版／1983　他